

理学部は今

No.27 March 2011



〈12/10〉新潟大学全学講義（御園生誠講師）
（関連記事P.2）



〈1/20〉台湾成功大学の教員2名（呉銘志博士と楊懐仁博士）
による理学部長表敬訪問（関連記事P.2）



〈1/27〉釜慶大学校自然科学部とのジョイントセミナー・リサーチキャンプ
（関連記事P.2）



〈2/25〉前期日程個別試験受験風景

CONTENTS

■ジョイントセミナー・リサーチキャンプ…	2	・洞口 高昭 教授（化学科）……………	4
■新潟大学全学講義を開催……………	2	・立石 雅昭 教授（地質科学科）…	5
■理学部の就職内定状況・ 就職支援活動とインターンシップ……	3	・内海 正紀 事務室長……………	5
■退職教職員の紹介		■卒業生からのメッセージ……………	6・7
・澤田 清 教授（化学科）……………	4	■各学科ニュース……………	8
		■これからの行事予定……………	8



ジョイントセミナー・リサーチキャンプ

大学院自然科学研究科で推し進める「グローバルサーカスによる大学院高度化教育-環日本海の大学を軸にする国際的人材の育成」事業は、特別教育プログラム、研究プログラム、生活支援プログラムの3つのプログラムから構成されています。このうち、特別教育プログラムの1つの事業としてリサーチキャンプがあり、本理学部も様々な形で寄与しています。一部ですが、詳細を理学部ホームページにも掲載しています。

特に最近受入れたものをご紹介します。まず、高澤准教授が1月20日~26日に台湾国立成功大学理学院地球科学科から教員2名と大学院生4名を受入れて、ジョイントレクチャー&リサーチキャンプを行いました。谷本理学部長への表敬訪問の際、3月に部局間交流協定を締結するため成功大学へ招待したいと提案されました。

また、1月26日~30日に大韓民国国立釜慶大学校自然科学部から教員12名、職員2名、博士研究員2名、大学院生



釜慶大学校とのDDP協定調印式

13名、東明大学校教員1名の総勢30名を受入れて、ジョイントセミナー・リサーチキャンプを開催しました。主に大学院生を対象とした英語に

よる口頭研究発表を数学系、物理学系、化学系に分かれて開催し、発表内容や発表の仕方などについて討論を行いました。また、物理学系や化学系では実験機器視察や研究室訪問などのリサーチキャンプも行いました。新潟大学からは大学院生だけでなく、教員・学部学生も参加して部局規模の国際交流の先駆けとなりました。

これらのリサーチキャンプの目的は、本学の学生の国際的な発表能力と研究能力の向上ですが、様々な分野の大学院生を本学へ招へいしてジョイントセミナーを行い、留学生を含めた学部学生や大学院生とともに研修旅行を行った結果、日本と相手国、大学院生と学部生、教員と学生、及び異分野専門間の交流が生まれ、新潟の地でお互いをよりよく知る契機となったと思います。これはリサーチキャンプ終了後、学生に提出してもらった報告書からも伺い知ることができます。また、これらの活動を通して、ダブルディグリープログラムに関する海外の大学との相互の研究教育体制も着実にできつつあります。1月27日に開催された、ジョイントセミナー・リサーチキャンプにおける、オープニングセレモニーでは、釜慶大学校大学院と新潟大学大学院自然科学研究科との間で国際交流協定書とダブルディグリープログラム(DDP)協定書に釜慶大学校の李炯基(Lee, Hyung Ki)大学院長と新潟大学大学院自然科学研究科の坪川研究科長が署名し協定が締結されました。これを契機に理学部の国際交流も益々発展していくことでしょう。

(大学院自然科学研究科 教授 田中 環)



新潟大学全学講義「持続可能な社会に向けた現実的な道と科学の責任」を開催

皆さんは、グリーンケミストリーをご存知でしょうか？環境と調和した化学という考え方とその取り組みを指します。グリーンは流行語ではなく、また持続可能な社会の形成を目指すことからサステナブル(持続可能な)ケミストリーとも呼ばれ、これらは国際的に認知・定着した用語です。

昨年暮れに、理学部後援による新潟大学全学講義が開催されました。講師は、日本化学連合会長・東京大学名誉教授の御園生誠先生です。御園生先生は触媒化学分野で著名ですが、我が国におけるグリーンケミストリーの指導的立場にある方です。



全学講義は、竹内照雄副学部長の司会進行で、濱口哲副学長の挨拶、次いで澤田清化学科長による講師紹介、御園生先生の講義と続きました。講義では、はじめに持続可能な社会のための科学および科学者の責任、次に気候変動に対するリスク

評価と対策、そして21世紀のエネルギー選択について解説されました。まとめとして、「今は新しい時代の幕開け、新物質、新材料、新プロセス、そして多くの技術チャレンジが必要」と若い学生を鼓舞してくださいました。会場には本学学生および教職員に加えて、一般市民の方々の姿も見受けられ、皆熱心に講義に聴き入っていました。講義の後には活発な質疑応答が行なわれ、最後に谷本盛光学部長より御礼の挨拶がありました。

今回の全学講義の世話役を担当した化学科では、これまでにグリーンケミストリーに関わる様々な取り組みを行ってきました。今後は、他学部・他学科と協力して今年度立ち上げたグリーンケミストリー連携教育研究センター(HP: <http://chem.sc.niigata-u.ac.jp/~gc-center/>)を拠点に、さらなる活動に取り組みたいと考えています。

(化学科 教授 長谷川英悦)





理学部の就職内定状況・就職支援活動とインターンシップ

今年は、とりわけ就職戦線が厳しくなっています。新潟大学理学部における1月末現在の就職内定率は、73.8%です。近隣4大学の理学部長会議が最近あったと報告されましたが、どの大学もほぼ似たりよったりの状況で、昨年よりも10%程度低い状態です。

理学部の学生は、例年、少しのんびりといいますがスロースペースで就職活動を進めていて、最終的に100%とか、98%という内定率に至るのですが、今年はなお心配な状況です。

全国的に内定率が低いのは、根本には一流企業が採用枠を広げない、日本の学生よりアジア系の留学生を採用する企業が増えたり、大企業や政府が大学を出たばかりの若者を「人材」として育てる意識が弱いなどの要因もあると、個人的には思っています。これらの点については、ぜひ国立大学協会等を通じて、関係当局に善処を訴えてもらいたいと希望するところです。

それと同時に、大学・学生側としてもできる努力をしなければなりません。理学部でも、様々な手だてを今とっています。一つ目は、キャリアセンターと連携した取り組みです。例えば、「就職何でも相談室」をキャリアセンターと連携して開設しています。二つ目は、これまで理学部では、学生の就職活動は学生の自主性に任せてすすめることも多かったのですが、今年は、この厳しい状況をふまえて学部内で議論した結果、学科として責任をもってきめ細かく学生の就職状況を把握し、それを理学部前体で集約するという取り組みをスタートさせています。学生と直接対応する当事者として、学科があくまで主体となって努力してもらうことが重要だからです。

就職は学生の将来に関わることでですから、あくまで学生本意に、学生の要望に添って、支援する形をどう強化するか、これが課題です。それに向けて、いま学部内の議論も活発になってきていますので、学部全体としてやれることをさらに考えてゆきたいと思っています。また、必要なら、同窓会、OB,OGの支援等も含め、あらゆる手だてを講じたいと考えております。

もう一点、ここで、就職にもかかわるインターンシップのことに触れておきます。

学生時代の就業体験をインターンシップといいます。この就業体験（インターンシップ）は、就業先の会社や仕事

内容、上司などに直接触れることで、「仕事観・人生観を養う」（＝「なぜ働くのか」、「なぜ（何のために、誰のために）生まれてきたのか、生きるのか」）及び「残りの学生生活ですべきことを明確にする」この2点を深めるのにも有効といわれます。インターンシップでは、仕事のスキルを高めたりすることよりも、卒業してからの自分の人生におけるペースづくりを行うこととなります。人生においては、常に目標を明確にし、「人間性を高め」、「自分の役割（特性）をはやく発見し、それを全うすること」、「その上で自分が幸せになり、まわりを幸せにすること」が大事といえるでしょう。はやくこのことに気づき（実感し）、全力を傾けて努力していけるかどうかは学部教育の段階としても重要な点です。実際多くの社会人が「自分たちの時代にこうしたものがあればやりたかった」とコメントされます。また「学生生活でしかできないこと」を焦って選択してしまったりしますが、「社会人になってから生きることを今から準備しておく」という視点も、人生全体を見渡すと大切です。

実は、会社にとっても、インターンシップは意味のあることです。つまり、教育の一端を企業が担うということで、そうした体験の場を提供すること自体に社会貢献の意義があります。またこれは会社の若手社員の育成にもなります。このなかで、主体となる学生は沢山のことを学ぶことができます。キーワードを並べますと、1.「働く」ことを学ぶ 2.将来働くために必要な力（社会人基礎力）を身につける＝「チームで働く力」「考え抜く力」「前に踏み出す力」 3.将来の視野を広げる 4.将来働く自信をつける 5.社会的責任を理解する 等です。さらに、内定を得るという採用直結型のインターンシップも稀にあります。

以上のように、インターンシップには利点が多いのですが、学生にとっては少しおっくうだったり、ハードルが高いと感じたりすることもあるようです。しかし、自分の成長のためですし、インターンシップのプログラムで単位をとれるようになっています。また、参加した人は異口同音に良かったことを語っていますので、ぜひ、今年は多数の学生に挑戦・参加してほしいと思っています。これまでのインターンシップに参加して良かったこと、学んだことは冊子にもまとめていますし、説明会も例年6月頃に開催しています。

(理学部就職・進路指導委員会委員長 赤井 純治)

平成22年度卒業予定者の進路内定状況（平成23年3月7日現在）

学 科	進 学	企 業	教 員	公 務 員	そ の 他	計
数 学 科	18	11	3	0	10	42
物 理 学 科	24	4	2	2	16	48
化 学 科	20	5	1	4	5	35
生 物 学 科	17	6	2	0	2	27
地 質 科 学 科	11	6	2	1	3	23
自然環境科学科	11	13	1	2	6	33
計	101	45	11	9	42	208



退職教職員の紹介

化学に魅せられて

化学科 教授 澤田 清



小学校から高校まで化学クラブ・理科クラブで過ごし、大学の理学部化学科へ入学しました。大学院へ進み、大学教員となり、好きな“化学”に浸かったまま定年を迎えることになりました。

大学で研究、教育を共にするのは、いつでも二十歳前後の学生といくぶん年上の院生、留学生です。自分の年が毎年1歳ずつ増えることを失念したまま、いつも同世代みたいな気分で過ごしてきました。自分の“趣味”でもある“化学”の教育、研究、知識吸収がそのまま仕事であったことは、この上ない幸せと思っています。毎年、種々の学会、会議に出席し、結果的に国内全県を訪問できました。そこでは“同窓会”のように語り合い、討論できました。また、国際会議、共同研究、IUPAC（純正応用国際化学会議）委員等で広く国外を訪問し、新潟での国際会議開催では長年付き合ってきた遠方の友と会うことができたことも至上の喜びでした。

ここ数十年は、中学、高校ではあまり好きではなかった「国語」、「英語」の作文、そして大学の「運営」が生活の殆どの時間になってしまいました。それなりに順応し、大学に寄与をしてきたと思うものの、一番大事な化学実験に触れる機会が限られていたことが、今にしてみると悔やまれます。

米国でのポスドク、分子研への転任等、幾たびか大学を留守にしましたが、新潟大学には足かけ43年お世話になりました。他大学へ就任した同期に比べ、新潟大学での研究環境は人間的にも経済的にも非常に恵まれていたと思っております。

いくぶん研究テーマを広げすぎたため、測定装置等が自分で賄いきれずに、他の研究室、教員の機器をお借りしました。ほとんどの場合、有り難くも自由に使わせて頂きました。幾つかの学会を新潟で開催し、その都度学内の関係者にはお世話をおかけしました。また学外の用務で職場を留守にすることも多く、教職員にご迷惑をお掛けしました。ひとえに皆様のご暖かいご支援により凌ぐことができたこと感謝しております。また、多くの卒業生、修生生のご協力により、今日までの成果を挙げ、評価されたことを、この場を借りて改めて感謝致します。

退職にあたって

化学科 教授 洞口 高昭



新潟大学理学部化学科を1968年3月に卒業し、その翌日から助手として勤めてから43年となります。当時は全国的に大学紛争が始まり、新潟大学もその渦中にありました。理学部は、開校以来、西大畑にあった旧制新潟高校の木造校舎を使っていて、五十嵐の新校舎に移転することが議論され、最終的に教授会で移転を決定しました。西大畑の校舎は古くて、大学としてはみすばらしい状態でした。1970年に西大畑から五十嵐へ移転し、新校舎は鉄筋コンクリート造りで教職員と学生にとっては憧れの的でした。当時、キャンパスには理学部校舎と教養部校舎しかなく、周囲は一面の畑で、夏は西瓜が秋は大根が栽培されていました。いかにも原野に移転したという感じでした。今はキャンパスに多くの学部が集まり建物がたくさんできて立派になり、当時の様子はとても想像できません。これも先人たちの多くの努力があったからであるということをお忘れいただければと思います。移転当時の理学部の教職員と学生は新しい校舎で教育・研究をし、自ら学ぶという夢に燃えていたように思います。みんなで新しい理学部を創っていくという意気込みがあり、教育と研究が軌道に乗ってきました。1990年代の初めまでは理学部校舎に教職員と学生と一緒に住んでおり、研究室ではお茶を飲み、食事をしながら、あるいは夜には時々飲み会を開いて酒を飲み、学生といろいろな話をしました。講義や実験で学生を教えることは勿論ですが、このような授業以外の学生との対話が教育と研究に大いに役立ったと思います。残念なことは、その後、化学科の教員や学生は、

理学部棟、大学院棟に分散しお互いに会う機会が少なくなったことです。

歴史を振り返ってみると、化学科が新潟大学理学部の5学科の1つとして発足したのが、1949年（昭和24年）6月1日です。それから数えて60年以上が経過しました。長い年月のようですが、過ぎてしまえばあっという間のことのように思われます。1953年度（昭和28年度）の化学科完成時の教員は教授3名、助教授2名、講師3名の計8名でした。第18回までの卒業生は西大畑で学び、卒業を迎えました。1965年度（昭和40年度）には理学部に修士課程が設置され、1985年度（昭和60年度）には大学院自然科学研究科に博士課程が設置されて大学としての組織が整い現在に至っています。20年毎に大きな変化があったといえます。現在の化学科の教員は教授7名、准教授8名の計15名、学生定員は35名で、規模は1953年度の学科完成時の約2倍となり充実してきました。これからは社会情勢が大きく変化し、大学もこれに対応していかなければならない時代となりました。今後の理学部のますますのご発展を願っております。

理学部教員を退職するにあたって

地質科学科 教授 立石 雅昭

1979年の4月、新潟大学に助手として奉職以来、32年にわたる教員生活を終え、無事に退職することになりました。この間、多くの先輩、同僚、そして、優れた学生・院生に恵まれ、充実した教員生活を送ることができたことを心から感謝しております。

専攻する分野の関係で、この間、上越・中越を中心に県内各地の沢筋に分布する地層や岩石について学生・院生、時には地元の小・中・高校の先生方と一緒に踏査してきました。学生の中には、卒論から修士論文までの3年間、調査地域の地元の方に大変なお世話を頂きました。中には、卒業後数年経っての結婚式にご出席いただいた方もおられました。そうした経験の中で、新潟の農・山村集落の大きな変容をも目の当たりにしてきました。とりわけ、中越・中越沖地震で被災した人々の大地への深い愛着と根強い生活力に感銘を受けてきました。家族共々、今しばらく、新潟に暮らすことにしておりますので、これからもお世話になることもあろうかと思えます。

人類誕生の痕跡を求めてのケニア、リフトバレーでの3ヶ月間の調査生活には深い思い出があります。視察に訪れた当時の文部省職員がヘリポートで私を目の前にしながら、日本人は誰も迎えに来ていないのかとつぶやくほど、真っ黒に日焼けしました。かなり過酷な生活でしたが、若いときだったから大過なく過ごせたのかも知れません。90年代になると、地球環境に関わる地質学的課題が浮上し、幸い、研究者仲間から声をかけて頂き、バイカル湖の湖底の地層の解析に何度かイルクーツクの街や美しいタイガの森を訪れました。当時、ソビエト連邦が崩壊し、ロシア共和国へという大きな政治的変革期で、お世話になった研究機関が予算的に大変困窮していた時代でもありました。97年から10年間

は、ベトナム、メコンデルタの調査に携わってきました。お世話になるホーチミン市内の地理学副研究所長を新潟にお招きして、当時進めていた佐渡の環境に関わる調査に同道いただいたことや、毎年、暮れには学生の希望者を募ってメコンデ



メコン河口での調査の一コマ

ルタの調査に帯同したことが思い起こされます。その学生たちの何人かが、今ではメコン沖合の石油探鉱に携わっています。国際河川メコンの作る広大なデルタの調査では、どこが河口とも判然としない河口部で、調査船として借り上げた漁船で夜を明かし、マングローブ林越しの雄大な日没・夜明けに驚嘆したことや、大学院時代の恩師に改めてお出し頂いて、河川環境の調査方法を学んだこと等が思い起こされます。

ここ数年は県内の地質踏査を手がけてきた関係で、柏崎刈羽原子力発電所の中越沖地震での被災を受けて、その安全・安心を確保する立場から県の委員会に参加していますが、こちらの方はまだしばらく頭を悩ませそうです。いずれにしても、今しばらく、新潟の地であって、いろいろ発信する機会もあろうかと思えますが、よろしく願います。

新潟大学の職員の一員として

事務室長 内海 正紀

平成21年4月1日に着任し、この3月までの2年間を理学部にお世話になりました。新潟大学に奉職して以来、様々なことがありましたが、中でも最大の変革は、平成16年4月1日の「国立大学法人化」です。昭和24年6月に新制大学として発足し、55年間を経過してきた国立大学から、独立行政法人として新たな道を歩むこととなりました。国の行財政改革により、大学の運営予算も年々確実に削減され、厳しさが増えています。しかし、法人化されたことにより、大学独自の裁量で弾力的に執行できるようになったこともあります。特に、学生支援などに多く活用されているところです。

国立大学法人化に伴い、我々教職員の身分も、国家公務員から法人職員に変わりました。数年前から決まり準備していたことですが、急激な変化に戸惑い、過渡的には混乱したこともありました。今までの既成概念を捨て、急激な切り換えを求められ、対応に苦慮したものです。これからも数々の難題に取り組みなければなりません。

卒業式を迎える皆さんは、それぞれ進学或いは就職されることでしょう。皆さんを取り巻く日本社会は、経済などの様々な分野で厳しい状況下にあります。皆さんにその厳しい現実が覆い被さっています。しかし、「明けない夜はない。」と言われてるように、遠からず明るい未来がやって来るでしょう。苦難に挫けることなく努力され、ご自分の人生を切り拓かれることを期待しております。



最後に、新潟大学理学部の益々の発展と、卒業生と教職員の皆様のご健康とご活躍を祈念して、お世話になった皆様への御礼の言葉とさせていただきます。どうも有難うございました。



卒業生からのメッセージ

これからの自分を見据えて

数学科 小池 卓也



高校生から大学生になる4年前は、ただ数学をより深く学べるとか、一人暮らしが出来るぐらいのぼんやりした将来像しか持っていませんでしたが、4年間という大学生活の中でそのぼんやりな自分はこれからどうするべきなのかと考えさせる自分へと変わっていったように実感しています。

私は人との付き合いがあまり上手な人間ではありませんが、大学生活の中で勉強などのわからないことを相談したり、一人暮らしの中で今までやらなかったことを話したりと、精神面でも成長していたのかなと思います。

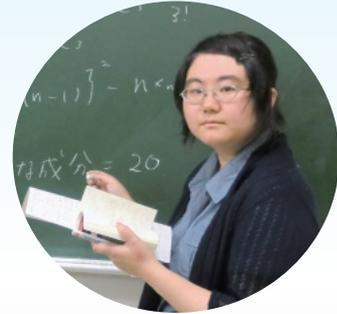
また、アルバイトでは仕事における人間関係など、大学における勉強とは違った働く楽しさを身に染みて学ぶことが出来ました。

来年私は大学院に進もうとしている身ですが、この4年間を土台としてその先のアルバイトではなく責任をしっかりと背負った社会人としての自分を目指して進めていけたらと思っています。

今までお世話になった方にはとても感謝しています。また、これからもお世話になる方はどうぞまたよろしくをお願いします。

卒業にあたって

物理学科 碓 香菜絵



物理学科に入学して、毎日が勉強と色んな人達との触れ合いでとても濃密な時間を過ごしました。その中で、勉強では分からない事がありましたし、友達との交流の中でトラブルもたくさんありました。けれど、友達と勉強会をしたりして好きな物理を学ぶ事は楽しかったです。また色々な事を議論して人と深く付き合える喜びを知りました。

勉強以外にも部活などを通してたくさんの事を体験し、たくさんの人と出会い、楽しく4年間を送らせて頂きました。これからも多くの事を学びつつ、多くの人との出会いを大切にしていきたいと思います。ありがとうございました。

大学生活を振り返って

化学科 萩原 達也

入学してすぐに学内を歩いていると、肌寒いはずなのに半袖・ハーフパンツで楽しそうにテニスをしている人たちがいました。近くにいくとすぐにテニス部に入部しないかと誘われました。よく知らないまま入部したのですが、初心者も僕以外に何人かいたのですぐに馴染めました。

練習中は先輩方が教えてくれるので、上達の実感とともにどんどのめり込んで行きました。春には団体戦の大きな大会があるので冬から朝練をしたり、休みの日も練習したりしました。テニス部はかなり厳しい部活ですが、飲み会なども盛んでメリハリのあるとても楽しい部活でした。

部活(と勉強)の傍らでアルバイトもしていました。近くの飲食店でバイトをしていたのですが、少し変わったお店で(詳しくは言えませんが)「こんなこともバイトがやっているの?!」というようなことも多々ありました。まあそのおかげで

自分の料理の幅が広がっただけでなく、とてもやりがいを感じ、長く勤められたのだと思います。始めた頃は先輩社員と喧嘩することもありましたが、the大将って感じの尊敬できる人に会ったり、得るものが大きなバイト先だったと思います。

勉強しに大学に入ったはずなのに、勉強の思い出は全くありません。留年しなかったのと無事に進学先が決まっただけ良かったと思っています。今思うと大学生活はあっという間に終わってしまいましたが、意外に充実していて良かったなと思っています。これから入学する人も、今在学している人も、取りあえず何か打ち込むことを見つければ自分なりに充実した大学生活になるんじゃないかと思っています。



本人は最後列左端

卒業にあたって

生物学科 遊佐 和之

時間が流れるのは早いもので、4年間の大学生活が終わろうとしています。この4年を振り返ると、多くの事柄が思い出されます。学科やサークル、学外活動などを通して多くの人と出会い、色々な経験をしてきました。その一つひとつから、様々なことを学ばせてもらい、少しずつ自己を成長させられたように思います。そして、その中で多くの良き友人をつくることのできたことが、私にとって大きな財産です。とくに、学科の友人たちの存在はかけがえないものです。彼らとは遅くまで講義や実習の課題に取り組んだり、4年次の卒業研究では互いに切磋琢磨しながら実験に明け暮れたりしました。公私にわたり友人たちと過ごした時間は、その全てが忘れがたい思い出です。

学業に関しては、講義や研究を通して生物学を深く学んだつもりですが、結局4年間でわかったことは、生物は多様であり、生命現象は複雑であるということです。けれども、難解な生物学を面白いと感じ続けながら4年間を過ごせたのは、生物学科の先生方による熱心な指導があったからであり、大学院進学への大きな動機となりました。

怠けてばかりの私が無事に卒業を迎えられることができるのは、多くの人たちに助けられてきたからです。日々の大学生活をともに過ごし支えてくれた友人や、熱心に指導して下さいました先生方や先輩方に深く感謝いたします。本当にありがとうございました。



本人は右端

卒業にあたって

地質科学科 西谷 真也

新潟大学理学部地質科学科に入学して、早くも4年が過ぎました。今の自分と4年前の自分を比べると、ずいぶん成長したなと思います。

大学での集大成である卒業研究では、北海道日高山脈にて調査・研究を行いました。卒業研究を終えて一番思ったことは、3年生までの講義や実習の積み重ねがとても重要だということです。また、卒業研究のテーマ設定、野外調査、室内作業において、懇切丁寧なご指導をいただいた豊島先生には感謝の言葉もありません。学生最後の研究を思い切り楽しめたこと、本当にうれしく思っています。



最後になりましたが、大学4年間において先生方をはじめ、先輩、後輩、そして両親には本当にお世話になりました。そして、4年間をともに過ごした地質科学科の仲間たちは、私にとって彼らと出会うためにこの学科に入ったのだと言っても良いくらい大切な存在です。4年間ありがとうございました。

卒業後は晴れて社会人となりますが、人と人とのつながりを大切に、感謝の気持ちを忘れずに生活したいと思います。

4年間を振り返って

自然環境科学科 加藤 智帆美

新潟大学に入学して、気が付いたらもう卒業を迎えてしまいました。私はここでとても大切な宝物を得ることができました。それは自然環境科学科の34人の仲間です。

この4年間、本当にたくさんの思い出ができました。泊まりがけの実習をはじめ、海に魚を捕まえに行ったこと、猛暑にも暴風雨にも負けずに地層を削ったこと、悪臭に耐えながら解剖実験をしたこと、学科行事のために夜遅くまで準備を頑張ったこと、飲み会でいつも羽目を外す人がいたこと……。辛かったことも今となっては良い思い出で、みんなで支え合って駆け抜けた4年間だったと感じています。

また、3年の冬から始めた就職活動は、遊んでばかりだった自分を見つめ直すきっかけとなりました。自分の長所や短所なんて普段全く考えずに生活してきましたが、真剣に自分自身と向き合い、将来何がしたいのか、どんなことに向いているのか考えました。その中で直すべき所なんて山ほど見つけることができました。特に実感したことはコミュニケーション能力の足りなさです。自覚してもすぐに変えることはできず、今も失敗して反省しての繰り返しです。でも、その部分に気づいて努力するようになっただけ少しは成長できたかなと思います。4年になり研究室に配属されても、指示されてから行動する部分が多く、先生や先輩方に迷惑をかけてしまいました。しかし親身に指導していただいたおかげで無事に課題研究をやり遂げることができました。自然環境科学科のみんな、先生方、本当にお世話になりました。これから人とのつながりを大切に過ごしていきたいです。

最後に、いつも私の考えを尊重し見守ってくれた家族に心から感謝しています。



本人は前列右端



各学科ニュース

生物学科

平成23年2月8日に平成22年度の大学院自然科学研究科博士前期課程基礎生命科学教育研究群の学位論文発表会、2月9日に理学部生物学科の課題研究発表会がそれぞれ開催されました。修士2年生17名、4年生27名がこれまでの研究成果について口頭で立派な発表を行いました。

修士学生、4年生ともこの3月に全員卒業し、就職・進学とそれぞれ新しい道に進んでいくこととなりますが、諸君の人生が素晴らしいものになることを生物学科の教職員一同、願っています。



修士論文発表会を終えて



課題研究発表会を終えて

自然環境科学科

本年度は、33名が当学科を卒業します。卒業する4年生のほとんどは、学科の各先生方の研究室に1年間所属し、それぞれの先生の指導の下に個別の研究テーマについての課題研究を行ってきました。そのクライマックスとなる課題研究発表会が、2月10日（口頭発表）と12日（ポスター発表）に行われました（写真はポスター発表の様子）。先生や下級生、大学院生らの多くの聴衆に対して1年間の成果を発表する様子から、各人の成長を容易に見て取ることができました。



物理学科

昨年10月11日、新潟大学WEEKの企画として物理学科では、『みてさわって！

身近な物理と物理学最前線』を開催しました。これは大学祭にこられた一般の方々を対象に、物理実験の実演や物理現象を応用したおもちゃの解説をおこなったりするものです。ご来場の皆様方、およびご協力くださった方々、特に地質科学科の松岡先生に深く感謝いたします。ありがとうございました。

3月25日から28日まで新潟大学において、第66回日本物理学会が開催されます。これは全国規模の学術講演会で、約5000名の参加者による講演や討論がおこなわれます。物理学科では実行委員長の土屋先生を中心に、学会開催のための準備に参加しています。なお、会期中には市民科学講演会も開催されます。以下をご覧ください。

◎開催日時：3月27日（日）

◎会場：新潟県民会館大ホール

◎入場料：無料（事前申込は必要ありません）

◎講演プログラム

13:30 - 14:30

題目：エネルギーと地球環境の未来を考える

講師：有馬朗人先生

武蔵学園長・静岡文化芸術大学理事長

元文部大臣・元東京大学総長

15:00 - 16:00

題目：私たちの子孫が安全に生きていくために

—超伝導で地球を鉢巻きにする—

講師：北澤宏一先生

科学技術振興機構理事長



これからの 行事予定

- 3月23日(水) 卒業式
- 3月28日(月) 理学部後援会理事会
- 4月5日(火) 入学式、理学部後援会総会
- 4月11日(月) 授業開始
- 4月16日(土) 黎明祭

お問い合わせ
窓口のご案内

〒950-2181 新潟市西区五十嵐2の町8050
新潟大学理学部学務係

TEL : 025-262-6106

FAX : 025-262-6354

Mail : gakumu@ad.sc.niigata-u.ac.jp

リサイクル適性 (A)

この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。